現代言語学（翻訳）第４章

日　野　資　成

はじめに

前回は、O' Grady その他（2005）による Contemporary Linguistic（5th Edition）の第３章（pp.57-101）を翻訳した。今回は引き続き、第４章（pp.111-142）を翻訳する。

第４章　「形態論 : 語構造の分析」

William O' Grady
Videa Guzman

あらゆる語をなくなる前に刻め
オリバー・ウェンデル・ホームズ・シニア

目的

この章では以下のことを学ぶ :
語の構造の分析方法
接頭辞、接尾辞、接中辞による語形成
既存の語を組み合わせた語形成の仕方
数、格、屈折、時制などの文法概念の表示方法
あまり一般的でない方法による語形成
語形成の過程と音韻論の相互作用

言語にとって語ほど重要なものはない。音の要素にすぎない音素やシラブルなどと違って、語は音韻形式に加えて意味も持っている。また、必要なときに作られ、なくなる文とは違って、語は話し手の頭の辞書あるいは**語彙目録**（lexicon）に永久に蓄えられる。語はコミュニケーションという建物を作る基礎的ブロックのようなものである。

高校生は、read、language、on、cold、if などの単語を平均６万語知っていて、それらの形式と意味は他の何ものによっても予測することができない。これらの語や他の要素に一般規則を適用することによって、数え切れないほど多くの語を作り、理解することができる。たとえば、fax という動詞を知っている英語話者はだれでも、faxed はその過去形で faxable はファックスできるということを表し、fax machine はファックスを送ったり受けたりする機械を表すということを知っている。

言語学者は、語と語形成にかかわる文法の一部を**形態論**（morphology）と呼んでいる。形態論研究は、言語の機能のしかたに対する重要な視点を提供し、言語範疇の違いの必要性、言語の内的構造の存在、語を作ったり変えたりする様々な方法を明らかにする。

１　語と語構造

英語の母語話者は、会話音声の流れを語に分解したり、文を書くときどこで分かち書きしたらいいかに困難を感じることはない。しかし、語とは何だろうか。

言語学者は、**語**（word）を言語の中で最小の**自立形式**（free form）と定義する。自立形式とは、隣り合う要素との関係で固定した場所に起こる必要はない。単独で現れる場合がほとんどである。たとえば、次の文を見てみよう。

１）Dinosaurs are extinct.

この文中の dinosaurs は語であり、複数を表す -s は語ではないことはだれでも直感でわかる。鍵となるのは、-s は単独では起こらず、前の名詞から切り離すことができないので自立形式ではないということである（別の範疇にくっつかなければならない要素は、ここでハイフンとともに示される）。

２）*Dinosaur are –s extinct.　[* は非文法的]

一方、dinosaurs は、単独でも起こるし、文の中の異なる場所にも起こるので、語である。

３）話者 A:What creatures do children find most fascinating?

話者 B: Dinosaurs.

４）a. Paleontologists study dinosaurs.

b. Dinosaurs are studied by paleontologists.

c. It' s dinosaurs that paleontologists study.

are のような語は単独では起こらない。しかし、隣り合う語との関係での、起こる場所は完全に固定されているわけではない。次の例が示すように、are は疑問文の場合、文の最初にも起こる。

５）Are dinosaurs extinct?（Dinosaurs are extinct と比較せよ）

1.1　形態素

シラブルや文と同じく、語はそれぞれの関係でつながった、より小さい単位からなる内的構造を持っている。最も重要な語構造の要素は、意味や機能の情報を持つ言語の最小単位である**形態素**（morpheme）である。たとえば、builder という語は二つの形態素からなる。build（「建設する」という意味を持つ）と -er（全体を名詞として機能させ、「～する人」という意味を持つ）である。同様に、houses という語は house という形態素（「家」という意味を持つ）と -s（二つ以上という意味を持つ）からなる。

一つの形態素からなる語もある。たとえば、train という語は、意味や機能を持つ、より小さな単位に分けることができない（tr と ain、あるいは t と rain など）。そのような語は**単純語**（simple word）と呼ばれ、二つ以上

表 4.1　一つ、あるいはそれ以上の形態素からなる語

一つ	二つ	三つ	四つ以上
and			
boy	boy-s		
hunt	hunt-er	hunt-er-s	
act	act-ive	act-iv-ate	re-act-iv-ate

の形態素からなる**複合語**（complex word）とは区別される（表 4.1 参照）。

自立形態素と結合形態素

それだけで語になる形態素を**自立形態素**（free morpheme）といい、他の要素に付属する形態素を**結合形態素**（bound morpheme）という。たとえば、boy はそれ自体で語になるので自立形態素であるが、複数の -s は結合形態素である。

英語で自立形態素で表現される概念が他の言語で同様に扱われているわけではない。たとえば、ハレ語（カナダの北西部で話されているアタパスカン言語）では、体の部分を表す形態素は、常にその所有者を表す形態素に付属する（表 4.2、補助記号「 ´ 」は高い声調を表す）。

表 4.2　ハレ語の体の部分を表す語

所有者がないとき	所有者とともに使うとき
*fí（頭）	sefí（私の頭）
*bé（腹）	nebé（あなたの腹）
*dzé（心臓）	ʔedzé（だれかの心臓）

英語ではもちろんこれらの体の部分を表す語は自立語であり、他の要素に付属する必要はない。

一方、英語では結合形式であっても、同じ内容を指す語が他の言語で自立形式であることもある。たとえば、「過去」とか「完了した」という概念を表す英語の -ed は結合形態素であるが、タイ語ではそれが自立形態素 lɛɛw で表される。次の文が示すように、この形態素は動詞の次に来る語によって動詞から離れている。

6）Boon　than　khaaw　lɛɛw
　ブーン　食べる　ご飯（過去）
　（ブーンはご飯を食べた）

異形態

形態素の変化した形を**異形態**（allomorph）と呼ぶ。英語の非限定を表す

形態素には二つの異形態がある。母音ではじまる語の前の an と子音ではじまる語の前の a である。

７）an orange　　abuilding
　　an accent　　a car
　　an eel　　a girl

ここでの an と a の選択はつづりでなく、発音にもとづいていることに注意しなさい。したがって、an M.A degree、a U. S. dollar などとなる。

複数形 -s の発音の違いも異形態の例である。

８）cats
　　dogs
　　judges

初めのは複数形が /s/ であるが、二つ目のは /z/ で、三つ目のは /əz/ である。ここでも、異形態の選択は音韻論的事実によっている（これについては６節で論ずる）。

ほかにも permit/ permiss-ive、include/ inclus-ive、electric/ electric-ity などが異形態の例である。これらの単語を発音すると、ペアの初めの形態素の最後の子音の発音が、接尾語がつくことによって変わる。

異形態において、つづりの変化に惑わされないことが重要である。たとえば、create と ride は creative、riding になるとき最後の e が落ちるが、これは異形態的変化ではない。最後の子音の発音は変化しないからである。一方で、electric/ electric-ity、impress/ impress-ion は、つづりは変わらないが異形態的変化である。ペアの初めの形態素の最後の子音の発音が変化するからである。

6.2　語構造の分析

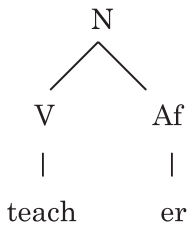
語の内的構造を示すとき、形態素に分けることだけでなく、それぞれの形態素を意味や機能によって分類することが必要である。

語根と接辞

複合語は**語根**（root）の形態素と、一つあるいは二つ以上の**接辞**（affixes）からできている。語根は語の核をなし、意味の大きな要素を担っている。語根は、名詞（N ← Noun）、動詞（V ← Verb）、形容詞（A ← Adjective）、前置詞（P ← Preposition）などの**語彙範疇**（lexical category）に属する。これらの範疇については第５章の 1.1 節で詳細に論ずる。ここでは、名詞は具体的、抽象的なものを指し（tree、intelligence など）、動詞は行為を指し（depart、teach など）、形容詞は属性を指し（nice、red など）、前置詞は一般的に空間的関係を指す（in、near など）。

語根と違って、接辞は語彙範疇に属さず、常に結合形態素である。たとえば、接辞 -er は teach などの動詞につく結合形態素で、全体の名詞に「教える人」という意味を与える。この語の内的構造は図 4.1 のように示すことができる（Af は接辞 affix の略である）。

図 4.1　teacher という語の内的構造



語構造の例を図 4.2 に付け加える。

図 4.2　語根と接辞からなる語の内的構造

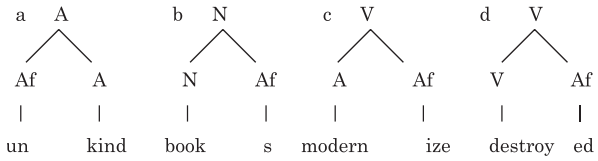
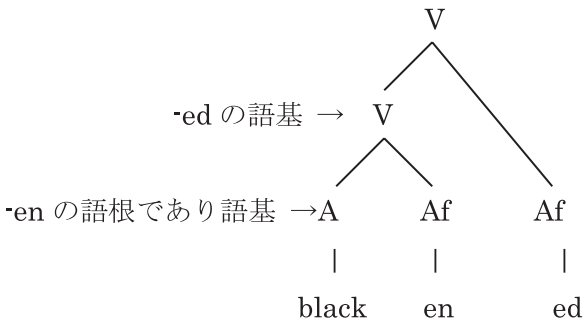


図 4.1 や図 4.2 のような、構造を示す図を**トゥリー（tree）**と呼ぶ。この図はカギカッコを使って、[A[Af un][A kind]]、[N[N book][Af s]] のように示すこともできる。しかしこれは少し見にくいので、一般的にはトゥリーを使って示される。ここで、語構造の詳細が考察のポイントに無関係である場合、形態素の境界のみを示す un-kind、book-s などの単純な表示が伝統的な方法である。

語基

語基（base）とは、接辞がつく形式である。多くの場合、語基は語根でもある。たとえば、books では、接辞 -s がつく形式（語基）は語の語根と対応している。しかし、語基は、常に一つだけの語根よりも大きいことがある。たとえば、blackened という語では、過去時制の -ed が動詞語基の blacken につくが、blacken は語根形態素の black に接辞 -en がついた単位である。

図 4.3 語根と語基の違いを示す語



この場合、black は語全体の語根であるだけでなく、-en の語基でもある。一方、blacken という単位は -ed の単に語基である。

接辞の種類

語基の前につく接辞を**接頭辞**（prefix）といい、語基のあとにつく接辞を**接尾辞**（suffix）という。英語では、表 4.3 のように、どちらの接辞も現れる。

表 4.3　英語の接頭辞と接尾辞

接頭辞	接尾辞
de-active	vivid-ly
re-play	govern-ment
il-legal	hunt-er
in-accurate	kind-ness

節 2.1 と 4.1 で、英語の接辞の特性をさらに詳細に考察する。

接頭辞と接尾辞ほど一般的でない接辞に、他の形態素の中に起こる**接中辞**（infix）がある。表 4.4 に、フィリピンのタガログ語における接中辞 -in- を挙げる。これは、語根の最初の子音のあとに挿入され、完了のアスペクトを表す。

表 4.4　タガログ語の接中辞

語基	接中辞の入った形式
bili「買う」	b-in-ili「買った」
basa「読む」	b-in-asa「読んだ」
sulat「書く」	s-in-ulat「書いた」

初心者の学生は、boy-ish-ness の -ish のような形態素を、boy と -ness の間に起こるので接中辞だと思うかもしれない。しかし、これは正しくない。接中辞であるためには、接辞は別の一つの形態素の内側に起こらなければならない（タガログ語の -in- は sulat（「書く」）という形態素の内側に現れている）。-ish の場合、単に二つの形態素の間に起きているだけである。

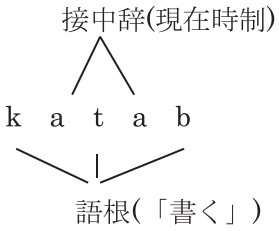
特別なタイプの接中辞の体系がアラビア語にある。アラビア語では語根が三つの子音からなり、二つの母音からなる接辞がこの語根に、ばらまかれるように挿入される（以下の例で語根の分節は太字で示されている）。

9）**katab**　**kutib**　　**aktub**　　**uktab**

「書く」「書かれてきている」　「書いている」　「書かれている」

このような語の構造の示し方を以下に挙げる。語根と接辞に異なる**層**（tiers）あるいは構造のレベルを付与し、語の実際の発音の中に示す（図 4.4）。

図 4.4　アラビア語の接中辞構造



問題のある例

英語の大多数の複合語は自立形式である語根からできている。たとえば、re-do や treat-ment では、do と treat は動詞で、接辞なしに現れることができる。ほとんどの複合語が語根からできていて、語根はそれだけで語となるので、英語の形態論は**語ベース**（word-based）といえる。

しかし、これはすべての言語にあてはまるわけではない。たとえば、日本語やスペイン語では、動詞の語根は常に接辞とともに現れ、それだけで自立することはない。

英語にも結合形式の語根がある。たとえば、unkempt という語は un- という接頭辞（否定を表す）と kempt という語根（「きちんと整った」という意味）からできているように見えるが、kempt は自立できない結合形式である。かつて英語には kempt という語（「髪をくしでとかした」という意味）が存在し、それに un- という接辞がついた。しかし、kempt はのちに英語からなくなり、un- という接辞が結合形式の語根とくっついた unkempt だけが残ったのである。

結合形式の語根を含んだ語が語全体として英語に借用されている例もある。たとえば、inept（「的外れの」）という語はラテン語の ineptus（「適さない」）から来ている。inept の apt（「適切な」）という語との関係はある時期明白であったが、今は接頭辞と結合形式の語根からなっている。

他に形態論的分析がやっかい極まる例として、receive、deceive、conceive、perceive と permit、submit、commit がある。これらの語はラテン語からフランス語経由で英語に入った語で、これらを構成するシラブルは

それ自体決まった意味があるわけではない（たとえば receive の re は redo の re のように「もう一度」という意味がない）。したがって、これらの語は一つの形態素からなると解釈する。

ここで興味深いのは、ceive や mit に決まった意味がないのに、それらに代替形式があることである。これによって、これらが言語で特別な位置を占めるといえる。たとえば、receive や deceive の ceive は、receptive、deceptive のように cept になり、submit、permit の mit は submissive、permissive のように miss になる。

2　派生

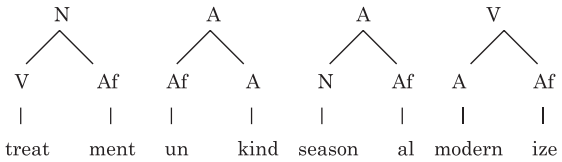
派生（derivation）とは、接辞をつけることによって語基とは意味や範疇が異なる語を形成する過程である。英語で最も一般的な接尾辞の一つが -er である。これは動詞のあとについて、「X をする人」という意味の名詞を作る（表 4.5）。これは、名詞につく New Yorker や islander の -er とは異なり、形容詞につく taller、smaller の -er とも異なることに注意。

表 4.5　接尾辞 -er

動詞語基	-er がついた名詞
sell	sell-er
write	writ-er
teach	teach-er
sing	sing-er
discover	discover-er

派生によってできた語の内的構造の例を以下に示す。

図 4.5　派生によってできた語



どの構造においても、接尾辞や接頭辞が特定の語基と結びついて新しい語を作っている。たとえば seller の場合、接尾辞 -er は動詞 sell と結びついて名詞の seller を作る。unkind の場合､接頭辞 un- が形容詞 kind と結びついて、意味の異なる新しい形容詞を作っている。

このように作られた語は独立した語彙項目となり、話者の心的辞書に追加される。時間の経過とともに、もとの形態素から予測できないような特別な意味を持つようになることもある。たとえば、writer という語は、単に「書く人」という意味でなく、生活のために書く人（「作家」）という意味になっている。comparable は最初のシラブルにアクセントがある場合、「比べることができる」という意味でなく、「似たような」という意味になる。profession は、「告白すること」でなく、「職業」という意味になっている。

2.1　英語の派生接辞

表 4.6 に、英語の派生接辞の一部と、語基の範疇から語基のついた全体の語の範疇の変化を示す。

表 4.6　英語の派生接辞の例

接辞	変化	例
接尾辞		
-able	V → A	fix-able、do-able、understand-able
-ing$_1$	V → A	the sleep-ing giant、a blaz-ing fire
-ive	V → A	assert-ive、impress-ive、restrict-ive
-al	V → N	refus-al、dispos-al、recit-al
-ant	V → N	claim-ant、defend-ant
-(at)ion	V → N	realiz-ation、assert-ion、protect-ion
-er	V → N	teach-er、work-er
-ing$_2$	V → N	the shoot-ing、the danc-ing
-ment	V → N	adjourn-ment、treat-ment、amaze-ment
-dom	N → N	king-dom、fief-dom
-ful	N → A	faith-ful、hope-ful、dread-ful
-(i)al	N → A	president-ial、nation-al

-(i)an	N → A	Arab-ian、Einstein-ian、Minnesot-an
-ic	N → A	cub-ic、optimist-ic、moron-ic
-less	N → A	penni-less、brain-less
-ous	N → A	poison-ous、lecher-ous
-ize$_1$	N → V	hospital-ize、vapor-ize
-ish	A → A	green-ish、tall-ish
-ate	A → V	activ-ate、captiv-ate
-en	A → V	dead-en、black-en、hard-en
-ize$_2$	A → V	modern-ize、national-ize
-ly	A → Adv	quiet-ly、slow-ly、careful-ly
-ity	A → N	stupid-ity、prior-ity
-ness	A → N	happi-ness、sad-ness
接辞	変化	例
接頭辞		
anti-	N → N	anti-hero、anti-depressant
ex-	N → N	ex-president、ex-wife、ex-friend
de-	V → V	de-activate、de-mystify
dis-	V → V	dis-continue、dis-obey
mis-	V → V	mis-identify、mis-place
re-	V → V	re-think、re-do、re-state
un-1	V → V	un-tie、un-lock、un-do
in-	A → A	in-competent、in-complete
un-2	A → A	un-happy、un-fair、un-intelligent

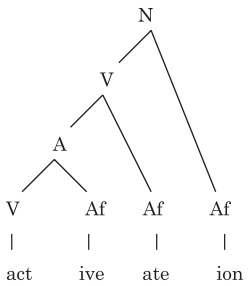
最初の例は、動詞の語基に接辞 -able がついて、動詞が形容詞になることを示す。つまり、動詞 fix に接辞 -able がついて、「固定することができる」という意味の形容詞ができる。

接辞がつく語基の範疇を決定するのが困難な場合もある。たとえば、work という語基は動詞として使われたり（they work hard など）、名詞として使われたりする（the work is time consuming など）。どちらの範疇の語基に -er がつくのかを決める決め手は何か。その鍵は teacher や writer などで語基の範疇が明確であることである。ここで、teach と write は動詞でしかあり得ないので、worker で -er と結びつく語基は動詞であると推論できる。

複合派生

派生は二回以上適用できるので、図 4.6 のように複数のレベルの語構造を示すことができる。

図 4.6　複数のレベルの内的構造を示す語



activation という語は、いくつかの層をもつ構造で、それぞれの層が、適切な語基に接辞がつくことを示している。最初の層では、接辞 -ive が動詞語基 act について形容詞に変えている（表 4.6 にあるように、接辞 -ive は動詞を形容詞に変える接辞である）。次の層では、接辞 -ate が active という形容詞について activate という動詞に変えている。最後に接辞 -ion がこれに結びついて activation という名詞に変えている。

複合語の内的構造が明確でない場合もある。たとえば、unhappiness という語は、次の二つのどちらのやり方でも分析できるように見える。

しかし、un-、-ness という接辞の特性を考察することにより、b でなく a の方が正しいことがわかる。

考察の鍵は接頭辞 un- が名詞でなく形容詞と結びつくということである（表 4.7）。

ここから、un- は、接尾辞 -ness によって名詞に変えられる前に形容詞の happy と結びつかなければならないことがわかる（図 4.7a のように）。

一方、unhealthy という語の場合、接頭辞 un- は、接尾辞 -y が語根 health についたあとでつけなければならない。なぜなら、-y は名詞を形容詞に変える接尾辞で、un- がつくことができる範疇の語を作るからである（図 4.8）。

表 4.7　接頭辞 un

un+A	un+N
unable	*unknowledge
unkind	*unhealth
unhurt	*uninjury

図 4.7　unhappiness という語の二つの構造

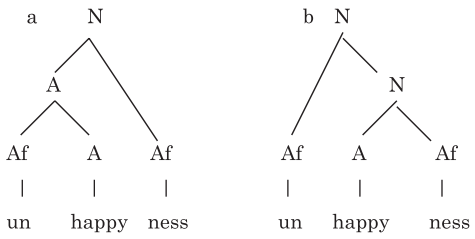
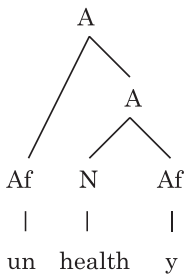


図 4.8　unhealthy という語の内的構造



派生の制約

派生には特別な制約や制限があることが多い。たとえば、-ant という接尾語は（表 4.6 参照）、assist や combat などのラテン語から来た語とは結びつくが、help や fight などのもともとの英語とは結びつかない。つまり、assistant や combatant はあるが、*helpant や、*fightant はない。

派生接辞が特別な音韻論的特性を持った語基としか結びつかないことがある。このいい例が接尾辞 -en である。-en は、表 4.8 のように、形容詞と結びついて使役の意味を持った動詞を作る。

表 4.8　–en の使用の制約

可能	不可能
whiten	*abstracten
soften	*bluen
madden	*angryen
quicken	*greenen

この対照から、-en は阻害音で終わる１シラブルの語基としか結びつかないことがわかる。つまり、white は阻害音で終わり１シラブルであるから whiten ができるが、abstract は２シラブルであるから *abstracten ができず、blue は１シラブルでも阻害音で終わっていないので *bluen ができないのである。

2.2　二つの種類の派生接辞

英語では二つの種類の派生接辞を区別することが一般的である。**１等級接辞**（Class 1 affixes）は、語基の子音や母音の変化を起こしたり、アクセントの位置を変えたりする。さらに、それらは結合形態素の語根と結びつくことが多い（表 4.9 参照）。

表 4.9　１等級接辞の及ぼす影響

接辞	例語	接辞による変化
-ity	san-ity	語基の母音が /e/ から /æ/ に変わる（sane 参照）。
	public-ity	語基の最後の子音が /k/ から /s/ に変わる。
		アクセントが第２シラブルに移る（públic が publícity に）。
-y	democrac-y	語基の最後の子音が /t/ から /s/ に変わる。
		アクセントが第２シラブルに移る（démocrat が demócracy に）。
-ive	product-ive	アクセントが第２シラブルに移る（próduct が prodúctive に）。
-(i)al	part-ial	語基の最後の子音が /t/ から /ʃ/ に変わる（part 参照）。
-ize	public-ize	語基の最後の子音が /k/ から /s/ に変わる（public 参照）。
-ion	nat-ion	語基の最後の子音が /t/ から /ʃ/ に変わる（native 参照）。

これに対して、**２等級接辞**（Class 2 affixes）は音韻論的に中立的で、語基の分節やアクセントの変化をもたらさない（表 4.10 参照）。

表 4.10　２等級接辞の例

接辞	例語	接辞による変化
-ness	prompt-ness	ない
-less	hair-less	ない
-ful	hope-ful	ない
-ly	quiet-ly	ない
-er	defend-er	ない
-ish	self-ish	ない

次の例が示すように、２等級接辞は、語根と１等級接辞の間に入ることはできない。

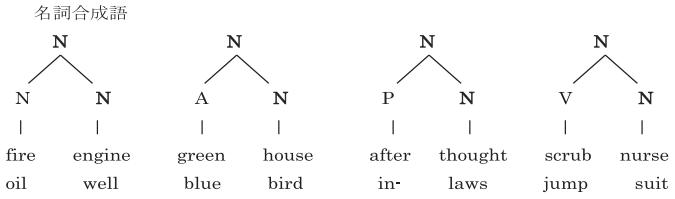
10）relat-ion-al　　divis-ive-ness　　*fear-less-ity　　fear-less-ness
　　語根 1　1　　語根 1　2　　語根 2　1　　語根 2　2

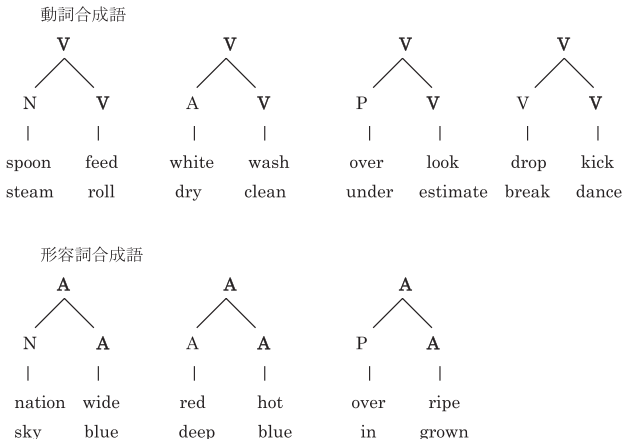
英語では２等級のあとに１等級が現れるのを除き、１等級と２等級のすべての組み合わせがある。

３　合成

英語で、語形成の技術として広く使われているものに**合成**（compounding）がある。これは、既存の語を二つ組み合わせて作られる（表 4.9 参照）。ごく稀な例外を除き、でき上がった**合成語**（compound word）は名詞、動詞か形容詞である（前置詞による合成語には into、onto などがある）。

図 4.9 英語の合成語の例

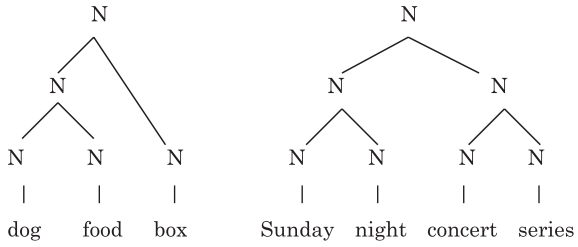




これらの合成語において、一番右側の形態素が合成語全体の範疇を決める。たとえば、greenhouse は、右側の house が名詞なので名詞になり、spoon-feed は feed が動詞なので動詞となり、nationwide は wide が形容詞なので形容詞になる。合成語全体の範疇を決める形態素を**主要部**（head）と呼んでいる。

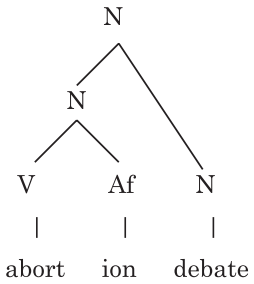
このようにして形成された合成語は他の語と組み合わさってさらに大きな合成語となる（図 4.10 参照）。

図 4.10　小さな合成語から形成された合成語



さらに、合成は派生とも相互作用し、新たな語が形成される。たとえば、abortion debate などの合成語では、最初の語が派生の結果できたものである（図 4.11 参照）。

図 4.11　合成語における派生との相互作用



3.1　合成語の特徴

英語の合成語を示すつづり方には一貫性がなく、二つをつなげて一語で書いたり、間にはハイフンを入れたり、また、二つを離して書いたりする。しかし、発音においては重要な一般化がある（表 4.11 参照）。特に、形容詞と名詞からなる合成語は最初の語にアクセントがある。一方、形容詞と名詞からなる非合成語は後の語にアクセントがある。

表 4.11　合成語と非合成語

合成語	非合成語
greénhouse「温室」	green hoúse「緑に塗られた家」
bláckboard「黒板」	black bóard「黒い板」
wét suit「ダイバーの着るもの」	wet suít「濡れた着物」

英語の合成語の二つ目の特徴は、時制と複数形の語尾が最初の語にはつかずに、合成語全体につくということである。（しかし、swordsman や parks supervisor などの例外もある。）

11）*The player [dropped kick] the ball through the goalposts.
　　The player [drop kick]ed the ball through the goalpost.
12）*The graduate students go to the pub on [Fridays night].
　　The graduate students go to the pub on [Friday night]s.

3.2　内心的合成語と外心的合成語

英語の合成語は、前と後の語の関係がさまざまな範囲に及んでいる。表４.12 には、名詞と名詞の合成語における意味の関係を示している。

表 4.12　名詞と名詞の合成語

例	意味
steamboat	蒸気によって動く船
airplane	大気を通って飛行する運搬物
air hose	空気を運ぶホース
airfield	飛行機が着陸する野
fire truck	火を消すために使われる車
fire drill	火事のときのための訓練
bathtub	入浴するための場所
bath towel	入浴後に使うタオル

多くの場合、合成語は主要部（右側の語）の下位概念を表す。たとえば、dog food は食物の一種であり、caveman（粗野な男）は人の一種であり、sky blue（空色の）は青の一種である。これらと、表４.12 にあるすべての例を**内心的合成語**（endocentric compounds）と呼ぶ。しかし、合成語の中には、前後の語の意味を合わせても全体の意味にならないものもある。たとえば、redhead は頭の一種ではなく、赤い毛の人を指す。同様に、redneck は首の一種ではなく、人を指す。このような合成語を**外心的合成語**（exocentric compounds）と呼ぶ。

表 4.13　英語の合成語の複数化

内心的合成語	外心的合成語
wisdom teeth	saber tooths（肉食動物の絶滅種、ネコ科で長い牙をもつ）
club feet	bigfoots（神話に現れる生き物「大男」）
policemen	Walkmans（ポータブルラジオ）
oak leaves	Maple leafs（トロントの NFL ホッケーチーム）

主要部が tooth や foot などの不規則複数形の語である場合、この二つの違いが明白に現れる。

内心的合成語は普通の不規則複数になるが（teeth、feet など）、外心的合成語は複数語尾 -s によって複数になる。

3.3　他の言語の合成語

合成語を形作る規則は言語によって異なるが、語を組み合わせて、さらに複雑な語を作る方法はどの言語にも見られる。表 4.14 にあるように、名詞合成語が最も一般的である。

表 4.14　さまざまな言語の名詞合成語

韓国語		
kot　elum まっすぐな　氷 「つららら」	isulu　pi 露　雨 「こぬか雨」	nwun　mwul 目　水 「涙」
タガログ語		
tubig　ulan 水　雨 「雨水」	tanod　bayan 監視員　町 「警官」	anak　araw 子ども　息子 「孫」
ドイツ語		
Gast　hof 客　宿 「ホテル」	Wort-bedeutungs-lehre 語　意味　理論 「意味論」	Fern-seher 遠い　見るもの 「テレビ」
フィンランド語		
lammas-nahka-turkki 羊　肌　コート 「羊の毛皮のコート」	elin-keino-tulo-vero-laki 生活　手段　収入　税　法律 「収入税法」	
ツォツィル語		
pif　xól 包む　頭 「帽子」	méʔ-k'ínobal 母　霧 「虹」	ʔóra-tʃón ただちに　ヘビ 「獰猛なヘビ」

合成語の主要部が左に来るタガログ語の例外を除いて、表 4.14 に挙げた言語はすべて主要部が右に来ている。

特殊なタイプの合成語に**抱合**（incorporation）がある。これは、語（通常は名詞）と動詞が結びついて動詞合成語を作る過程である。次の例は、北東シベリアで話されているチャッキー語と、ミクロネシア言語のポナペアン語

である（以下の例が示すように、抱合には名詞や動詞への音韻論的適応がみられる。意味論的には、名詞の非特定化にかかわる）。

13) a. チャッキー語

抱合なし	抱合あり
tə-pelaɹkən　qoɹŋəa	tə　-qoɹa- pelaɹkən
私　去る　　トナカイ	私　-トナカイ- 去る
「私はトナカイを去るところだ」	「私はトナカイを去る途上にある」

b. ポナペアン語

抱合なし	抱合あり
I　pahn　pereki lohs	I　pahn　perek-los
私　つもりだ　解く　マット	私 つもりだ　解く - マット
「私はマットを解くつもりだ」	「私はマットを解くことに従事するつもりだ」

抱合は英語ではあまり生産的な語形成ではない。しかし、They are housecleaning や We have to baby-sit tonight などにその兆候は見える。

４　屈折

すべての言語に単数複数、過去と非過去の区別がある。そのような区別は**屈折**（inflection）によって示される。屈折とは、文法の情報を示すために語の形式を変えることである（屈折接辞がつく語基を**語幹**（stem）と呼ぶ）。

4.1　英語の屈折

言語における屈折を示す過程においては、接辞による方法が圧倒的である（たとえば、日本語、スワヒリ語、イヌイット語、フィンランド語など）。英語は、八つだけの屈折接辞（すべて接尾辞）を駆使する言語である。表４.15 に英語の屈折接辞を示す。

英語の屈折はほとんどが規則的接辞によるが、規則的でない屈折の方法もある。動詞の場合が最も顕著で、過去時制は内的変化によって示される。たとえば、come/came、see/saw、fall/fell、eat/ate、drink/drank、lose/ lost、is/was など。

表 4.15　英語の屈折接辞

名詞	
複数形の -s	the books
所有格 (属格) の -s	John's book
動詞	
三人称単数非過去の -s	He reads well.
進行形の -ing	He is working.
過去時制の -ed	He worked.
過去分詞の -en/-ed	He has eaten/ studied.
形容詞	
比較級の -er	the smaller one
最上級の -est	the smallest one

規則的屈折と不規則的屈折は原理的に異なるやり方で示される。規則的屈折は一般的形態論の規則によってなされる（-ed をつけることによって過去時制を表すなど）。一方、不規則的な形式は言語使用者の記憶に永久に記憶されなければならない。語基を示されたときに過去形を言うのにどれくらい時間がかかるかという実験によって、この違いが明白になった。不規則形式の場合、反応時間と動詞の使用頻度の間に相関関係がみられたのである。使用頻度の高い see や find などの動詞の方が使用頻度の低い stride や bid などの動詞よりも過去形を言うのに時間がかからなかった。使用頻度の低い形式を記憶から呼び起こすのには時間がかかるのであろう。一方規則動詞の場合は、反応時間は使用頻度とは無関係であった。過去形が規則的に作られ、頭の中の辞書を調べる必要がないからである。したがって、使用頻度の高い walk などの動詞と使用頻度の低い discern などのすべての動詞の過去形が同じ時間で言えたのである。

4.2　屈折と派生

屈折と派生はどちらも接辞によってなされるので、その違いは微妙で、どちらに機能しているか不明な接辞もある。屈折接辞と派生接辞を区別する三つの基準を挙げる。

範疇の変化

まず、屈折は文法範疇を変えたり、語の意味を変えたりはしない（図４.12）。

図 4.12　屈折の結果 : 語基の範疇も意味も変わらない

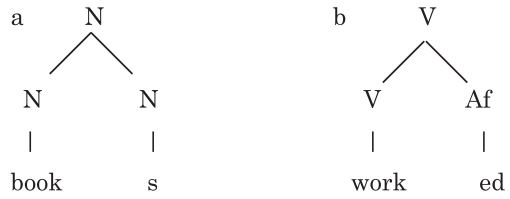


図４.12 で複数の接尾辞 -s をつけた形式は語基と同じく名詞であり、語基の意味も変わらない。book は一つのものを指すのに対し、books はいくつかのものを指すという点では異なるが、それらが指し示す本というものは変わらない。同様に、過去を示す接辞 -ed は行為が過去に起こったことを示すが、語基の範疇の動詞はそのままで、語基の指す行為もそのまま変わらない。

一方、派生接辞は語基の範疇を変えたり、意味を変えたりする。図４.13 の例を考察しよう。

図 4.13　派生の結果 : 語基の品詞の変化、あるいは意味の変化がある

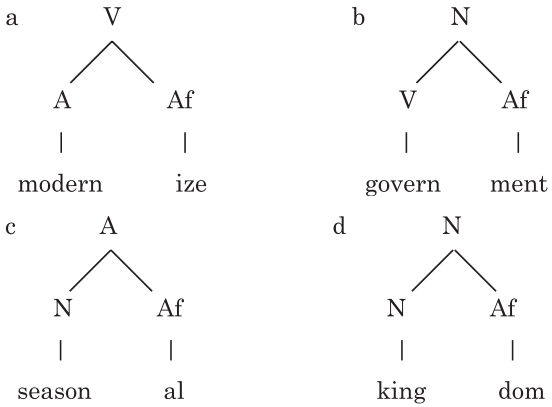
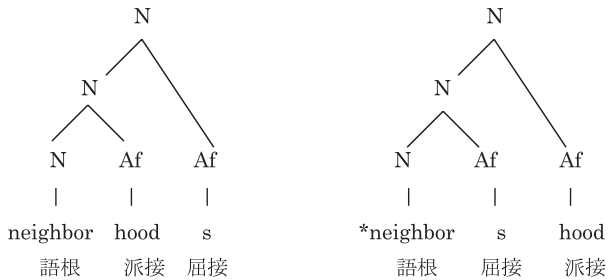


図 4.13 の a が示すとおり、-ize は形容詞から動詞を作り、特性（modern）から行為（modernize）に意味も変えている。-ment（V を N に）と -al（N を A に）についても同様に範疇と意味を変えている。-dom の場合は範疇の変化はもたらしていない（king も kingdom も名詞である）。しかし、-dom は意味を「人」（king）から「場所」（王国）に変化させている。

語順

屈折接辞の二番目の特性は、語基に結びつくときの派生接辞との順番についてである。図 4.14 に示すとおり、派生接辞は屈折接辞よりも前に語基と結びつかなければならない（屈接は屈折接辞、派接は派生接辞である）。

図 4.14　派生接辞と屈折接辞の位置：派生接辞が語根に近くなければならない



これらの例で、派生接辞の外に屈折接辞が位置することから、屈折は派生よりも後に起こることがわかる。

生産性

屈折接辞と派生接辞を区別する三番目の基準は**生産性**（productivity）にかかわっている。生産性とは、語基との結びつきの自由度である。屈折接辞は例外が比較的少ない。たとえば、-s は複数形をなし、どの名詞にもつく（oxen とか feet などの数少ない例外を除いて）。

一方、派生接辞は語基の種類が制限されている。たとえば、-ize は限られた形容詞と結びついて動詞に変える派生接辞である。

14）modern-ize　　*new-ize
　　legal-ize　　*lawful-ize
　　final-ize　　*permanent-ize

動詞の場合、やや複雑である。というのは、多くの英語の動詞が不規則な過去形を持っているからである（saw、left、went など）。にもかかわらず、屈折接辞 -ed は、派生接辞の -ment などよりもずっと一般的に適用される。たとえば、表４.16 のすべての動詞は規則的過去形を持つが、初めの三つだけが接辞 -ment がつく。

表 4.16　屈折接辞 -ed と派生接辞 -ment の動詞語基への適用性

動詞	-ed との形式	-ment との形式
confine	confined	confinement
align	aligned	alignment
treat	treated	treatment
arrest	arrested	*arrestment
straighten	straightened	*straightenment
cure	cured	*curement

同じ形式の接辞が屈折接辞であったり、派生接辞であったりする。たとえば､英語には三つの -ing がある。一つは屈折接辞､あと二つは派生接辞である。屈折接辞の -ing は、He is breathing のように動詞について別の動詞を作る。派生接辞の -ing の一つは The breathing of the runners のように、動詞について名詞に変える。もう一つは the sleeping giant のように、動詞について形容詞に変える（表 4.6 参照）。-en と -ed にも二つの種類があり、一つは屈折接辞（表４.15 参照）、もう一つは派生接辞である。後者は stolen money や escaped convict の stolen、escaped などのように動詞を形容詞にする。

4.3　屈折の表示方法

これまでの例が示すように、屈折の最も一般的な方法は接辞による（英語は接尾辞による）。しかし、屈折は接辞以外にも、内的変化、変異、反復、声調など、様々な方法で表示される。

内的変化

内的変化（internal change）とは、次の表 4 .17 の例のように、文法の対照を示すために非形態的分節を置き換える過程である。

表 4.17　英語の内的変化

sing（現在）	sang（過去）
sink（現在）	sank（過去）
drive（現在）	drove（過去）
foot（単数）	feet（複数）
goose（単数）	geese（複数）

sing や sink、drive などの動詞は母音を置き換えることによって過去形が作られる（sing、sink の場合、i が a に代わる）。**母音変異**（ablaut）という語も、母音交替によって文法対照を示す過程を指して使われる。

内的変化の中には言語の歴史における比較的古い時代の、音韻論的条件にもとづく変化を反映しているものもある。不規則複数形の geese や feet がその例である。もともとの形式 goose、foot の母音は、古い複数形語尾の /i/ によって前舌化し、その後この /i/ はなくなった。英語とゲルマン言語におけるこの変化を**ウムラウト**（umlaut）と呼んでいる。

15）古い単数形 goose　/gos/
　　古い複数形　/gos-i/
　　ウムラウト　/gœs-i/
　　複数形語尾の喪失　/gœs/
　　他の変化（第 7 章参照 /ges/ から /gis/ へ ）

内的変化と接中辞には重要な相違がある。表 4.4 で示したタガログ語の例では、接中辞が挿入されたあとも語基は残っている（sulat「書く」と s-in-ulat「書いた」を比べなさい）。それに対して、foot/feet、sing/sang の母音交替においては、「足」の意味の *ft、「歌う」の意味の *sng という形式がない。さらに、タガログ語やアラビア語の状況と違って、内的変化によってできた分節はそれ自身が形態素ではない。ran の a や drove の o は「過去」という意味を表さないし、geese の ee も「複数」という意味を持つわけではない。

内的変化や接中辞の存在は語構造について大事な点を示している。それは、形態論はいつも**連鎖的**（concatenative）というわけではないということである。つまり、語構造は形態素を次々と順に加えてできているものばかりではない。

補充法

補充法（suppletion）とは、文法の対照を示すために全く別の形態素で置き換える変化である。

英語の補充法には、go の過去形を示す went や be 動詞の過去形を示す was や were がある。表４.18 に他言語の補充法の例を挙げた。

表 4.18　ヨーロッパの言語における補充法

言語	基本形	補充形
フランス語	aller（行く）	ira（「行く」未来形）
スペイン語	ir（行く）	fue（「行く」過去形）
ドイツ語	ist（is）	sind（are）
ロシア語	xoroʃo（よい）	lutʃʃe（「よい」の比較級）

補充法と内的変化を区別するのがむずかしい場合もある。たとえば、think や seek の過去形 thought や sought は補充法であろうか、内的変化であろうか。これらの例は内的変化の特殊な例として扱われる場合が多いが、言語学者の中には**部分補充法**（partial suppletion）という術語を使う人もいる。

反復

形態論的過程として一般的な方法に**反復**（reduplication）がある。これは、文法的、意味的対照を語基の全部または一部を繰り返すことによって示す方法である。語基全体を反復する**全体反復**（full reduplication）の例を表４.19 に示す。

一方、**部分反復**（partial reduplication）は語基の一部だけを反復する。表４.20 はタガログ語からのデータであり、ここでは、はじめの子音と母音のつながりのみを反復している。

英語にも限られた部分反復の例がある。小さいものを表す teeny-weeny、itsy-bitsy などであるが、屈折の対照の例として示すには例が少なすぎる。

表 4.19　全体反復の例

語基	反復した形式
トルコ語	
tʃabuk「速く」	tʃabuk tʃabuk「非常に速く」
javaʃ「遅く」	javaʃ javaʃ「非常に遅く」
iji「よく」	iji iji「非常によく」
gyzel「美しく」	gyzel gyzel「非常に美しく」
インドネシア語	
oranŋ「男の人」	oranŋ oranŋ「すべての男の人」
anak「子ども」	anak anak「すべの子ども」
maŋga「マンゴ」	maŋga maŋga「すべてのマンゴ」

表 4.20　タガログ語の反復

語基	反復形式
takbuh「走る」	tatakbuh「走る」未来形
lakad「歩く」	lalakad「歩く」未来形
piliʔ「選ぶ」	pipiliʔ「選ぶ」未来形

声調変化（tone placement）

アフリカのコンゴで話されているモノビリ語では、過去時制と未来時制を示すのに**声調**（tone）が使われる（表 4 .21 で高い声調は「 ´ 」で、低い声調は「 ` 」で表示される）。

ここでは、高い声調が過去時制と、低い声調が未来時制と結びついている。

表 4.21　モノビリ語の過去時制と未来時制

過去時制	未来時制
dá「ぴしゃりと打った」	dà「ぴしゃりと打つだろう」
zí「食べた」	zì「食べるだろう」
wó「殺した」	wò「殺すだろう」

4.4　その他の屈折現象

屈折は非常に広く使われている形態論的過程で、その効力は、ここで取り上げるものよりもずっと多くの現象に見られる。しかし、あと二つの現象も、世界の言語の中での重要性と使用頻度という点で、簡略ではあるが挙げる価値がある。

格（case）は文法的役割（主語、直接目的語など）を示すための語の形式の変化である。英語の代名詞の he が主語に、him が直接目的語に使われるのがその一例である。I と me、she と her、we と us などもそれと対照される（ここでの例はすべて、接辞でなく、全体的あるいは部分的補充法であることに注意）。

16）He met new professor.　The new professor met him.

↑　　↑

主語　　直接目的語

呼応（agreement）はある語が別の語と文法的特性を合わせるために屈折するときに起こる。特に一般的なのが数の呼応（単数と複数）と人称の呼応（一人称＝話し手、二人称＝聞き手、三人称＝その他の人）である。ここでも、英語の単純な例を挙げる。英語では、接尾辞の -s が三人称単数の主語のとき、現在形の動詞に現れる。

17）That man speaks French.

（I speak French/ They speak French では接尾辞 -s がない）

これ以外の屈折現象の詳細な議論については、**bedfordstmartins.com/linguistics/morphology** に行き、**inflection** と **case** をクリックしなさい。

5　その他の形態論的現象

人間の言語における語形成に貢献する過程について、あらゆる研究を紹介しようとする教科書はないであろう。これまでの節では、最も一般的で主要な過程について触れてきた。しかし、他にも考察に値するものはたくさんある。

5.1　接語化

形態素には、意味と機能という点で語と同様に作動するものもあるが、音韻論的理由により、独立した形式として自立できないものもある。**接語**（clitics）と呼ばれるこれらの要素は、他の語（**ホスト**（host）という）に常にくっつかなければならない。英語には接語のよい例がある。動詞が縮約された形式（am が 'm になり、are が 're になるなど）は、シラブルを構成できないので、それだけで自立できない。**接語化**（cliticization）は前の語にこれらの要素をつけるときに起こる。

18）a. I' m leaving now.
　　b. Mary' s going to succeed.
　　c. They' re here now.

接語化はフランス語でもよく起こる。フランス語では、動詞にくっつくアクセントのない接語代名詞がいくつかある。その中の二つは一語であるかのような発音になる。

19）Jean　*t'* aime.　　Suzanne　*les*　voit.
　　ジョン　あなたを－好きだ　　スザンナ　彼らを－見る
　　「ジョンはあなたが好きだ」　　「スザンナは彼らを見る」

英語の例のようにホストのあとにつく接語を**後接語**（enclitics）といい、フランス語の例のようにホストの前につく接語を**前接語**（proclitics）という。

接語化は接辞化と表向きは似ている。どちらも語基にくっついて独立できない要素だからである。しかし、ここで鍵となる違いは、接語は接辞と違って、動詞、名詞（あるいは代名詞）、前置詞などの語彙範疇に属するということである。

5.2　転換

転換(conversion)は、既存の形式に新しい統語論的範疇を付与する過程である。接辞をつけ加えたりはしないが、転換は派生の一種として考えられている。範疇と意味が変わるからである。そのために、**ゼロ派生**(zero derivation)とも呼ばれている。表 4.22 に英語で最も一般的な転換の例を挙げる。

あまり一般的でない転換としては、形容詞から名詞を作る **the poor**、

gays や、前置詞から動詞を作る **down a beer**、**up the price** などもある。

転換は通常一つの形態素のみからなる語に限られているが、**propos-ition**（名詞から動詞）や **refer-ee**（名詞から動詞）、**dirt-y**（形容詞から動詞）などの数少ない例外もある。

２シラブルからなる語の転換にはアクセント移動がよく起こる。表４.23にあるように、動詞は最後のシラブルにアクセントがあるが、名詞は最初のシラブルにアクセントがある（アクセントは「´」によって示されている）。

表 4.22　転換の例

名詞から動詞	動詞から名詞	形容詞から動詞
ink（a contract）	（a long）run	dirty（a shirt）
butter（the bread）	（a hot）drink	empty（the box）
ship（the package）	（a pleasant）drive	better（the old score）
nail（the door shut）	（a brief）report	right（a wrong）
button（the shirt）	（an important）call	total（a car）

表 4.23　英語のアクセント移動

動詞	名詞
implánt	ímplant
impórt	ímport
presént	présent
subjéct	súbject
contést	cóntest

5.3　切り取り

切り取り（clipping）は、複数のシラブルからなる語を短くする過程で、一つ以上のシラブルを省くことをいう。切り取りによってできた例としてLiz、Ron、Rob、Sue などの名前の省略がある。学生の会話にもよく見られ、professor が prof に、physical education が phys-ed に、political science が poli-sci に、さらに hamburger が burger になったりする。しかし、doc、ad、auto、lab、sub、deli、porn、demo、condo など、一般的に認められている例も多くある。

切り取りによってできていてもそれを認識していないような例もある。たとえば、zoo は zoological garden の初めを、fax は facsimile の初めを切り取ってできたものである。

最近では Web log から blog ができたりしている。これは個人的なウェブサイトでの出来事、コメント、リンクなどのログのことであるが、blog ができると、blog archive、blog template などの新しい合成語ができ、さらに things to blog about のように動詞に転換したりする。次にその動詞は blogger などの派生語を作る。この blog はアメリカ方言学会の 2003 年の会合の投票で、新しい語として最も成功した例となった。

5.4　混成語

混成語（blends）は、既存の二つの語の形態素単位でない部分を合わせた語であり、ふつうは初めの語の頭と後の語の終わりの部分でできる。たとえば、brunch は breakfast と lunch から、smog は smoke と fog から、spam は spiced と ham から、telethon は telephone と marathon から、aerobicize は aerobics と exercise から、chunnel は channel と tunnel から（イギリスと大陸との海中のリンク）、infomercial は information と commercial からできている。

言語によっては、三つの部分をつなげた語もある。次の例はマレー語からである。

20）pembanguan lima tahum > pelita（5 年のプラン）
　　発展　　5　年
　　universeti utara malaysia > unitama（北マレーシア大学）
　　大学　　北　マレーシア

英語の標準語彙に集中的に入り込んで、だれも混成だと意識していない語もある。たとえば、chuckle と snort から chortle ができたり（作家ルイス・キャロルによる）、motor と hotel から motel が、binary と digit から bit が、modulator と demodulator から modem ができたりしている。

一つの語全部と語の一部をつなげた語は、合成語と混成語のボーダーラインにあるといえる。たとえば、e-mail、perma-press、workaholic、medicare、

guesstimate、threepeat（スポーツファンによって使われ、３年連続で優勝すること）など。

5.5　逆形成

逆形成（backformation）は既存の語から接辞を除くことによって新たに語を作る過程である。たとえば、resurrect という語は resurrection から -ion を取ってできた。そのほかに、enthusiasm から enthuse が、donation から donate が、orientation から orient が、self-destruction から self-destruct ができている。

逆形成は語の形式についてのまちがった仮説を含むことがある。たとえば、pea という語は単数形の pease の最後の /z/ を複数形の接尾語だとまちがって解釈してできたものである。

英語で、-or や -er で終わる語は逆形成を起こしやすい。ほとんどの語が接辞化によってできているので（runner、walker、singer などなど）、ここの形式の語は何でも「動詞 +er」と知覚されてしまうのである。たとえば、editor、peddler、swindler などの語がそのように分析され、動詞 edit、peddle、swindle が新たにできた（表４.24）。

表 4.24　逆形成の例

既存の語	誤分析	逆形成によってできた動詞
editor	edit+or	edit
peddler	peddle+er	peddle
swindler	swindle+er	swindle

もっと新しい逆形成の例に laser からできた lase がある。この laser もふつうと違う語源がある（5.6 参照）。

現代英語でも逆形成で新しい語ができている。たとえば、attrition（磨滅、縮小）から attit（磨滅する、縮小する）ができ、1991 年の湾岸戦争時に軍の役人によって使われた（The enemy is 50 percent attritted）。本章の著者が気づいた語にも liposuct（liposuction より）、orate（oration より。新聞

の編集者が使用)、tuit (intuition より。ラジオで聞いた) などがある。

5.6　頭字語

頭字語 (acronyms) とは、句やタイトルなどの頭文字を組み合わせて、一語として発音した語である。機構や軍事科学用語の名称としてよく使われる。たとえば、UNICEF (United Nations International Children's Emergency Fund)、NASA (National Aeronautics and Space Administration)、NATO (North Atlantic Treaty Organization)、AIDS (acquired immune deficiency syndrome) などがある。

頭字語は、語ではなくアルファベットの発音をする LA (Los Angeles) や USA (United States of America) などの省略語 (abbreviations) とは区別される。この中間にあたる語の例が GP (general Purpose) からきた jeep である。

頭字語であると認識せずに使っている頭字語もある。radar (radio detecting and ranging)、scuba (self-contained underwater breathing apparatus)、laser (light amplification by stimulated emission radiation) などである。

5.7　オノマトペア

音に似せて作られた語はどの言語にもある。英語の**オノマトペア語** (onomatopoeic words) には、buzz、hiss、sizzle、cuckoo などがある。これらは本物の音とは違うので、言語によって形式が異なる (表 4 .25)。

表 4.25　言語によるオノマトペアの違い

英語	日本語	タガログ語
cock-a-doodle-doo	kokekokko	kuk-kukaok
meow	nyaa	ngiyaw
chirp	pii-pii	tiriit
bow-wow	wan-wan	aw-aw

英語に同等の語が見つからないようなオノマトペアが他の言語にはある。たとえば、アタバスカン言語のスラベ語では、「熊がキャンプからあまり遠

く離れていない所からたてる音を sah sah で表し、「ナイフが木にささった音」を ik で表し、卵が割れた音を tɬóòtʃ で表す。

5.8　新しい語形成のその他の例

中には最初からできている語もある。これは**造語**（word manufacture）、あるいは**新造語**（coinage）と呼ばれ、Kodak、Dacron、Orlon、Teflon など、製品の名によく使われる。これらのうち、あとの三つの語は最後に -on がつき、科学的に聞こえる。これは、ギリシャ語由来の phenomenon、automaton などに使われる接辞だからであろう。

新しい語は表４.26 のように、固有名詞からも作られる。

ほかに、ブランド名で、広く使われて一般名詞として受け入れられた語もある。Kleenex（顔用のティシュ）、Xerox（コピー）の二つはその最たる例である。

表 4.26　固有名詞由来の英語の語

語	固有名詞
watt	James Watt（19 世紀末の科学者）
curie	Marie and Pierre Curie（20 世紀初頭の科学者）
fahrenheit	Gabriel Fahrenheit（18 世紀の科学者）
boycott	Charles Boycott（19 世紀のアイルランドの不動産屋で、家賃を下げるのを拒んで追放された人）

６　形態音韻論

第３章で挙げたように、語の発音は音素が起こる音声環境の影響を受ける。たとえば、鼻音の子音前の /æ/ は鼻音化し（たとえば、[kæ̃nt] と [kæt]）、有声子音の前の /æ/ は長くなる（たとえば、[hæ:d] ‘had’ と [hæt] ‘hat’ など）。発音は、語の内的構造を含む形態論的要因の影響も受ける。このような現象の研究を**形態音韻論**（morphophonemics、morphophonology）という。

どの言語にも形態音韻論的現象がある。英語では、複数接尾辞の -s の発音に見られる。1.1 節で述べたように、形態 -s は [s]、[z]、[əz] のどれかの発音になる。

21）lip-[s]
pill-[z]
judg-[əz]

この変化には理由がある。無声音の -[s] は無声音のあとに起こり（[p] など）、有声音の [z] は有声音のあとに起こり（[l] など）、-[əz] は母音が入らないと発音不可能な子音群ができてしまうときに子音の間に母音 [ə] が入る（英語のシラブルでは末尾に [dʒz] が現れない）。しかし、ここで大事なのはこれらすべてが起こる条件である。これが典型的な形態音韻論的交代の例であるのには二つ理由がある。

一つは、接尾辞が、語基につくとき、つまり形態素の境界に起こるということである。[l] のあとに [s] を発音するのは、これらが同じ形態素の中であれば全く可能である（たとえば、else など）。しかし、複数形接尾辞の -s は、[l] で終わる語基につくときには [z] と発音しなければならない（ここでの pill-[z] のように）。

もう一つは、ここの交代が異なる音素（/s/ と /z/）にかかわっているということである。この点で、前の章で考察した交代（同じ音素の異音）とは異なっている。

形態音韻論についてのさらに詳しい議論については、**bedfordstmartins.com/linguistics/morphology** に行き、**morphophonemics** をクリックしなさい。

まとめ

この章では、人間の言語における**語**（word）の構造と形成に焦点をあててきた。多くの語は、**形態素**（morpheme）という、より小さい単位に分けられる。この単位はさまざまな分類をされ（**自立形式**（free form）と**結合形式**（bound form）、**語根**（root）と**接辞**（affix）、**接頭辞**（prefix）と**接尾辞**（suffix））、語形成するとき様々な条件によって結びついたり変わったりする。

語形成の二つの基本的過程が**派生**（derivation）と**合成**（compounding）である。その他の重要な形態論的現象には**接語化**（cliticization）、**転換**（conversion）、**切り取り**（clipping）、**混成**（blends）、**逆形成**（backformation）がある。

屈折（inflection）は、複数とか時制などの文法情報を表すための語の形式の変化であり、**接辞化**（affixation）、**内的変化**（internal change）、**反復**（reduplication）、**声調変化**（tone placement）などによって表される。

キーワード

一般的術語

形態素（morpheme）
形態論（morphology）
語（word）
異形態（allomorphs）
語彙目録（lexicon）
自立形式（free form）
結合形式（bound morpheme）
自立形態素（free morpheme）
複合形式（complex form）
単純語（simple words）

形態論分析にかかわる一般的術語

語彙範疇（lexical category）
語根（root）
語基（base）
接辞（affixes）
接頭辞（prefixes）
接尾辞（suffix）
接中辞（infixes）
層（tiers）
図式（trees）
語ベース（word-based）

派生と合成にかかわる術語

派生（derivation）
合成語（compound word）
合成（compounding）
１等級接辞（Class 1 affixes）
２等級接辞（Class 2 affixes）
主要部（head）
内心的合成語（endocentric compounds）
外心的合成語（exocentric compound）
抱合（incorporation）

屈折にかかわる術語

母音変異（ablaut）
呼応（agreement）
格（case）
連鎖的形態論（concatenative morphology）

反復（reduplication）
全体反復（full reduplication）
内的変化（internal change）
部分補充法（partial suppletion）
stem（語幹）
部分反復（partial reduplication）
屈折（inflection）
補充法（suppletion）
生産性（productivity）
ウムラウト（umlaut）

その他の形態論的現象
頭字語（acronyms）
混成（blends）
接語（clitics）
後接語（enclitics）
転換（conversion）
オノマトペア語（onomatopoeic words）
ゼロ派生（zero derivation）
逆形成（backformation）
切り取り（clipping）
前接語（proclitics）
新造語（coinage）
ホスト（host）
造語（word manufacture）

形態論と音韻論の相互作用にかかわる術語
形態音韻論（morphophonemics、morphophonology）

この章で用いた資料についての情報は **bedfordstmartins.com/linguistics/morphology** に行き、**Sources** をクリックしなさい。

推薦図書
省略

付録：なじみのない言語における形態素分析の方法

形態論分析で重要なのは、なじみのない言語における形態素を見極め、その形態素が持つ情報を決定することである（練習問題における多くの問題が、このような分析をするよい機会となる）。このような問題を解く鍵となる手続きを以下に述べる。

繰り返し起こる音の箇所を見つけ、繰り返し起こる意味とマッチさせる。

このような例として、次の表４.27 のトルコ語の問題を解いてみよう（さらに現実的な例は、多すぎるだけでなく、語の境界がわかりにくいような文まで含む）。

表 4.27　トルコ語の語

/mumlar/	「ろうそく (candles)」
/toplar/	「銃 (guns)」
/adamlar/	「男の人 (men)」
/kitaplar/	「本 (books)」

ここで注目すべきことは、シラブル /lar/ が四つの例すべてに起こることである。このトルコ語の例の英語訳から判断して、特別な意味特徴、つまり複数であることが四つの例すべてにあてはまる。前に述べた手続きを使って、/lar/ はトルコ語で複数を表す形態素であると仮説を立てることができる。これが決定すると、次に /mumlar/ の /mum/ も「ろうそく」という意味を持った形態素であり、/toplar/ の /top/ は「銃」である、などと推定することができる。さらにデータを増やすと、これらの推定が正しいことが確実となる。

なじみのない言語の形態論分析をするとき、避けるべき多くの罠がある。初歩のレベルの問題において考察する際に、次のガイドラインは特に重要である。

形態素の語順が英語と同じであると推測してはならない。たとえば、韓国語は場所を示す形態素（英語の at や in にあたる）が名詞よりもあとに現れる（hakkyo-eyse「学校で」）。

英語で表される意味の対照が分析する言語にもあると推測してはならない。たとえば、トルコ語には、英語の the と a の対照がない。中国語では、同じ代名詞が男性も女性も指して使われる（英語の he と she の区別がない）。

分析する言語に現れる対照がすべて英語にも現れると考えてはならない。

たとえば、bedfordstmartins.com/linguistics/morphology（inflection）で議論したように、数の範疇が三つある言語もあれば（イヌイット語では、単数、双数、複数の三つの区別がある）、時制の対照がたくさんある言語もある（たとえば、チペンバ語では八つの区別がある）。

形態素には異形態がある可能性もあることを忘れてはならない。たとえば、トルコ語のデータをさらに分析していくと、複数接尾辞は /lar/ 以外にも、語基の母音によって /ler/ もあることがわかる。